論文の内容の要旨

論文題目
サンティアゴ・デ・コンポステラへの徒歩の旅に関する民族誌的研究
　―「あいだ」における生―

氏　名
　土井 清美

スペイン北西部に位置するサンティアゴ・デ・コンポステラは、国内有数の観光地／キリスト教巡礼地として知られ、鉄道駅やバスターミナル、空港が整備されている。それにもかかわらず、20 世紀末より、あえて自転車や徒歩など自らの体力を使ってその地を目指す人々が国際的に増大している。出発の動機や目的は、道沿いに点在する教会建築の探訪、体力試し、傷心旅行から新婚旅行までときわめて幅広い。本論文は、フランス・スペイン国境付近からサンティアゴ・デ・コンポステラに至る約 800km の「サンティアゴへの道」における、徒歩の旅に焦点をあてた民族誌的研究である。

観光研究や巡礼研究の多くは、目的地における消費行動や文化表象、社会関係などに考察の焦点を合わせてきた。それに対し本論文は、目的地の重要性を否定することなく、同時に、目的地に向かう途上のプロセスをも注意深く検討する。目的地到達までの途上ないし「あいだ」に光をあてることこそが、問題の射程を観光研究や巡礼研究といった既存の枠組みに内閉せず、生についての理解へと深め広げるための鍵となることを、民族誌的考察を通じて提示する。そして、サンティアゴ徒歩巡礼とは、遠くを目指して移動しながら、その過程で遭遇する諸物と物質的・感覚的に濃い関係を保つ弁証法的な緊張関係の内にある動きであることが、本論文の記述分析の全体から描出される。

本論文は、序章と終章を含む全８章から構成される。序章ではまず、当該フィールドの徒歩巡礼に関する先行研究の多くが、方法的困難から調査エリアや研究対象の国籍、考察内容などを予め限定して理論的精緻化を目指すものであったこと、そしてその方向性が、地理的に長大で、多種多様な社会的背景をもつ人々が世界中から訪れては去っていく「サンティアゴへの道」というフィールドの現実を見えにくくしてしまう問題があることを指摘する。また、サンティアゴ徒歩巡礼を、狭義の宗教的実践、すなわち観念体系の同一性に基づく全体的・集合的傾向においてではなく、不慣れな場所へ出かける時に誰もが経験するような、アクチュアルな出来事のなかで構成される「旅」として検討する意義について論じる。こうした問題意識のもと本論文では、フィールドとしての「サンティアゴへの道」が、歩いて旅する人や調査者にさまざまな制約を課す場所であること、また、そうした具体的な方向付けに晒される状況において、能力に限界をもつ身体が把握可能な世界とはいかなるものかを問う必要性について述べる。

この問題意識を出発点として、本論文が（1）巡礼・旅・ツーリズム、（2）場所、（3）徒歩という三つの研究が交叉する領域において構想されたものであることが述べられる。そして、いずれにおいても、何らかの自然的・社会的環境要因が人の行動を全面的に規定するとか、観察可能な事象はすべて人為的に構築されたものであるといった決定論的な見方ではなく、制約が新たな経験の可能性をもたらすという考え方を導入する意義について、いくつかの理論的議論と結びつけながら論じられる。

続く１章では、次章以降の民族誌的考察のための導入として、サンティアゴ徒歩巡礼に関する地理・気候的特徴、歴史的変遷、巡礼者のプロフィール、風習などの概要が示される。

2 章では、同じ方角へ向かう巡礼者の集合的パターンと、そのパターンの堆積のなかで生じる変化の諸相が描出される。徒歩巡礼の動きは、一見地点間の単線的移動にみえるが、太陽の位置や地形、体調、巡礼宿のボランティアの行動など具体的で多様な状況に制約を受けたり促されたりしながら、出発と到着の繰り返しが行われている。この繰り返しはその都度の新しさをもたらし、次第に場所と身体双方に対する巡礼者の認識に変化を与える。

3 章は、苦痛や快といった身体と場所の関係の中から生じてくる感覚に着目しながら、途上と目的地の結びつきを把握することを目的とする。ここでは、身体的能力の有限性、ならびにサンティアゴ徒歩巡礼の期間と区間の有限性が重要なポイントとなる。巡礼者は苦痛の経験を、自らを新たな存在にしていく契機として位置づける。また、目的地に直行するのではなく、決定的ではない状態や多様な社会的関係のあいだに身を置くことへのこだわりをみせる。反対に、目的地は、そうした経験を中断させる場であり、それが巡礼者にアンチクライマックス的経験をもたらす。ところが、この連続性の中断によって、特定の期間と区間において再び遠い指標へ向かって行くという回帰的な動きの可能性が開かれる。これは、サンティアゴ徒歩巡礼路を何度も訪れる巡礼者が多い理由の一端を説明するものである。

これらの論点をふまえた上で、教会と巡礼者の関係についても検討する。教会といえば、とかくその制度的性格が議論の前提となりがちである。ところが、サンティアゴ徒歩巡礼のケースについて微視的な分析を進めると、ルールを媒介とした契約的関係が両者のあいだを取り結んでいることが明らかになる。この契約的関係が、巡礼者の行為を一定の仕方で方向づけると同時に、人間の思惑を越えた偶発的な経験を創出する。

4 章では、前章の議論、すなわち、人間同士で設定した拘束性によって、反対に人間の思惑を超える活動の領野が開かれるという考察をふまえたうえで、巡礼者の個別多様な経験を地続きなものにしているのは何か、という問い建てがなされる。推移的関係と偶発的関係の両方から構成される徒歩からみた世界、とりわけ、主体と客体、感覚と物質、客観と主観、有用と無用などによって選別されない、不慣れな場所を歩く身体が感受しうる無数の関係性の総体を、筆者は「ウォークスケープ」とよぶ。この「ウォークスケープ」のいくつかの特質を述べることにより、巡礼者各々の個別の経験を地続きにしている部分を浮かび上がらせる。

5 章は、民族誌的考察とより大きな理論的議論とを二重に組み込んだ、構成的にやや込み入った章である。前章で取り上げた「ウォークスケープ」に「遠近感」と「リズム」という切り口から整理を加え、その閉鎖性と開放性について考察を深めていく。そのことを通じて、巡礼者のあいだに生じる集合的な認識秩序の形成プロセスと、それが一概に秩序の強化や固定化に向かわない原理を明らかにする。リズムには乱れを含む時間的な法則性があり、遠近感については、対象と対象のあいだを占めるものなどが巡礼者の認識の仕方における輪郭の明瞭性に違いをもたらす。歩く人同士のリズムと遠近感の類似が次第に取りまく世界を自明にし、安定的で閉鎖的な性質をもつ世界「ウォークスケープ」を形成する。他方で、リズムや遠近感を共有しない他者と遭遇することによって、「ウォークスケープの」の同質性が退けられ、巡礼者の経験の個別多様性や反省的理解の可能性が維持される。

また、「顕現」の問題と人類学的フィールドワークのあり方について、筆者自身の経験に基づきそれぞれ根本的に新しい角度から考えることも、この章における論題である。前者については、まず顕現を、実体でも表象でもなく、自明視していたことが他からの揺さぶりによって反省的に発見される契機として位置づける。その上で、ヴァルター・ベンヤミンの概念を援用し、複製技術が著しく進展した今日的状況においては、正統性や権威を含意する「アウラ」を欠いた顕現とよびうるものがあることを指摘する。後者に関しては、特定のインフォーマントに照準を合わせた対面インタビュー調査だけでなく、フィールドにおけるリズムと遠近感をインフォーマントと共有した上で、対象との位置関係の相対的差異のなかで思考を組み立てる方法を提起する。これは、関心のある地域内の「客観的事実」の量をことさら強調したり、その反対にフィールドを新しい理論を提示するための道具のようにみなしたりといった研究とは異なる民族誌的理解のあり方を示すものである。

ここまでの章における考察をふまえ、6 章では、サンティアゴ巡礼路にまつわる、一見

無関係にみえる 4 つの個別の事例について、哲学者ウーテ・グッツォーニによる概念である「住まいつつさすらうこと」を手がかりに統一的に読み解き、さらにはそれによって、人類学における「ホーム」論に新たな視点を持ち込むことが試みられる。

終章では、各章の総括とともに、本論文の主張が人類学の内外においていかなる意味をもちうるかについて筆者なりの見解が述べられる。人類学を含む人文社会学では長らく、生産や生業における目的性や有用性についての問題関心が支配的であり、自然物はそれらを継続させるための手段として扱われてきた。本論文が明らかにしたのは、目的地までの迂遠な過程や、人間と自然物を等価的なものとして経験する余暇実践である。近さと遠さ、安定的でありつつ開放的なリズム、進歩主義や合理主義に還元できない自然観を扱ったこの論文は、フィールドワークの具体性・直接性に立脚する人類学ならびに労働と余暇と自然の可能な関係のあり方について考えるためのひとつの材料となりうるだろう。